町奉行衆　塚越大藏少輔

唐人參座之儀、以來江戸長崎會所と相唱、長崎屋源右衞門江、右會所附御用達申付候積、此程御掛合および候處、御差支之筋無之旨御挨拶有之候付、右之趣紀伊守殿江相伺候處、伺之通被仰渡候ニ付、其段源右衞門江爲申渡候、此段及御達候、

申閏三月

人參

〔紫芝園漫筆七〕世間庸醫卒不能療疾、藥之未效、其人疲困則恐元氣難保、於是急周大劑人參湯與服往不知元氣不能敵疾補之無益、夫人參誠所謂反元氣於無何有之鄉者也、然不治見病而專補元氣非所聞也、〇略中況今我東方、人參之價三倍黃金、亦不易多得之物也、豈可妄用以損人命、

〔醫事或問下〕一或問曰、今の名醫、朝鮮人參をもて氣を補ふといふ、しかるに氣に拘はらずして、療治し玉ふ事いかん、

答曰、元氣は、天地根元の氣にして、人の胎內にやどる時にうけ、造化の司所ゆへ、人力を以うけ變事あたはず、其氣虛する時は、死ぬるなり、其長短は天にまかすべし、此故に、天子諸侯たりといへども、心のまゝにならざるものなり、なんぞ草根木皮を以、氣を補助する事を得んや、古語曰、攻病以毒藥、養精以穀肉果菜とあり、いまだ藥をもて精を養ふといふ事を聞かず、仲景も、人參は心下の痞鞕を治すといふて、つゐに氣を補ふといふ事なし、氣を補ふといふは、疾醫絕て遙に後世の人の說なり、唐の世迄もいはざる證據には、孫思邈が千金方に、人參なき時は、茯苓をもてかふるといへり、此語あやまるといへども、人參は元氣を養ふとはいはざる事明なり、

〔松園漫筆三〕烏有いはく、人參を用ること、唐土にしては、和邦の生姜を用るがごとく、或は有、或は無、藥法の常なり、六君子湯も人參あり、小柴胡湯も人參あり、補中益氣湯も人參あり、參蘇飮も人參あり、日本の人參のつかひやうにてみれば、唐土のごとくせば、心やすき病人には、逆上などの